岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第28号（2009.11）

国のかたち、人のありよう、文学の未来
—グローカル時代にアメリカ文学をどう生かすか—

中　谷　ひとみ

1．物語が織り紡げない

最近、ある種の高齢者たちを若者は「カワイイ」と言う。[1] 年配の人々は尊敬こそされ「カワイイ」と言われるのは…と思ってしまうのだが、これを若者の独特の感性や新しい言語使用として評価すべきなのだろうか。言葉は時代と共に変化していくものだから、この言説がそのうち市民権を得ていく、いや現在の主要な意味や使い方に取って代わるかもしれない。しかし言葉の基本的機能というものが、いつの世でも変わらずにあるはずだ。若者に限らず、人は他者との繋がりを通して、多くの人間関係の中で、自己を確立していく。言葉を通して、それが織り紡ぐ物語を通して、世界や人間というもの、自分自身を理解していく。このことを考えれば言葉や物語の重要性は明らかだが、その言葉が今、危うい。言葉の貧困から物語が語れないのだ。本能的な自己防衛とも考えられるが、若者たちはクールなファッションでもあるかのように「ムカツク」という言葉を身に纏い、手当たり次第、他者や大人社会、既成の制度や価値観に牙を向ける。しかし「ムカツク」とは言っても、もっと具体的な気持ちが、その背景としての文脈・物語があるはずである。この個別の感情を表現する具体的な言葉を、多くの若者は持たない。あるいは表現しようとすらしない。物語が織り紡げないとはこういうことだ。言葉と物語を通して自分の具体的な気持ちや考えや価値観を明確にできないから、それらを見据えた上で物事に対処する能力も、社会の中で生きていく術も身につかない。「ウザイ」にせよ「ダサイ」にせよ、同様のことが言える。また、何に対してもどんな事態に遭遇しても、一様に「ウッソー」と反応して、具体的な言及が続かないことが多いのも、貧しい言説の例と言ってよかろう。これらの言葉で思考は停止し、会話は途切れ、人間関係の進展も、その中での自己の成長・発展も困難となる。言葉にも、それを使う人間の方にも何らかの問題があると考えざるをえない昨今である。

これらの若者はゆとり教育で育った世代である。その功罪が議論され、賛否両論あったが、「『過度の受験競争』のため、どの子どもにもゆとりが奪われているとの誤認のもとで、ゆとりが必要な生徒にはゆとりが与えられず、すでに学習離れを起こしている生徒たちを一層学習から遠ざける結果を生んでいることが明らかとな」（苅谷　86）った。学習達成度の二極化がますます進み、ゆとり教育は見直される。基礎的な知識もなく、考える習慣や方法も身についていなければ、のびのび自由に発想することなど、どだい無理なのだ。「ゆとり」と「生きる力」と「総合的な学習」の三者をつなぐ「子ども中心主義」あるいは「子どもが主人公」の教育という高邁な目的を掲げても、その達成など望めるわけがない。論理的思考力や判断力、自分の考えや思いを的確に表現する力、問題発見・解決能力は、

基礎的な事がらの暗記や厳密な言葉を使って具体的に考えられるか否かにかかっている。言葉による、直感を論理的に分節・展開する論理的思考と、逆に論理を修正もする直観的思考の協同作業（棚次 iv 参考）で、人は成長していく。この意味でも、若者たちが厳密な言語使用ができず、物語から遠ざけられたり遮断されていることは致命的である。

今までにない現象や行動や価値観が見られるようになり、若者に今何が起こっているのかが分析され、多くの若者論が書かれている。その多さは問題の深刻さの証左でもあろう。人は死んでも生き返るなどと、多くの若者が本気で信じているという。中西によれば、彼らの転生の感覚に反映されているのは既存のものとは異なる生命観である。近代の人間中心主義（humanism）の前提である、人間と非人間や、生と死の境界が揺らぎ、生命観は動揺し、取替可能な身体像が形成されている。現代の子どもたちは「身体も感覚もできるだけ無機的なかたちに変容させ」、今の自分を「受動性の極致におくことでどんな抑圧にも無感覚でいられるように」(329-30) しようとする。さらに中西は彼らの心の情景として「平気感覚」に言及する。

> 子どもたちが平気でいようとする場面は多様だ。だれかが教師にひどく叱られているとき、自分はその件には関係ないと知らせる平気、おしゃべりのなかでひそかに気にしていることを言い当てられ知らんぷりできる平気、他者と比較され優劣をつけられても一緒にいられる平気、それらすべてを大丈夫気にしてないと自分に言い聞かせる平気。要するに自分が問題のある人間、とるに足りない人間、劣った人間に分類されてしまいそうな状況にさいして、その状況は変えずに（変えられずに）分類を免れようとする振る舞いが平気感覚である。「状況は変えられずに」という点に注意しよう。いまここで本気に怒ったところで目の前の事態が決して変わるわけじゃない、という確信が一人ひとりに平気を強いるのである。(290-1)

自分だけその場面から脱けていることができないから、平気感覚は自身の感情がもたらす精神的危機を回避する手段であり、傍観者として現実をやりすごす術である。外から、大人からは子どもたちが平気なように、あるいは淡々としているように見えても、彼らの心理的負荷が小さいわけでは決してないし、そのアンバランスに本人が気づかないことも珍しくない。(291-92) この精神的危機から逃げおおせることはできず、子どもたちの内面や相互の関係はいずれ困難に直面することとなる。感情が抑圧されて内向するほど、心は停滞し、出口を求めるその心理的エネルギーのもたらす危険に曝らされることになる。彼らに今必要なものの一つが"life"（生命、生活、人生）をめぐる様々な物語だと言ってよい。

門脇の推測によれば、心の荒廃 ― 他人への愛着と信頼感の欠如、その集積としての社会への絶望、そしてその中で何もできぬ自分に対する無力感 ― が若者の間に蔓延し、それが日常的には、ばかばかしく空しいと知りつつも無益な行動にエネルギーを注ぐことで時間をやり過ごしつつ、置かれた状況ときっかけ次第では、殺人、自殺、新興宗教への入信、引きこもり、シミュレーション世界へののめり込みとなる (59-60)。彼はさらに、子どもや若者に見られる新奇な現象や行動から浮かび上がる

彼らの非社会的行動の特性として、以下の５点を挙げている。大人への不信に根ざす、社会への不信；今ある社会との関わりを避け、逃げ出そうとする；自分の可能性や自信、自分への信頼の喪失；そんな自分を相対化する視線あるいは自省能力の欠如；無意味な行動に熱中することで、あり余る時間とエネルギーを消費するしか、自虐的で自暴自棄な行為に熱中するしかない。その結果としての行動の中でも最も顕著な特徴が「生きた生身の人間を排除し排斥」（87-88）することである。社会や、反抗／挑戦する生き方からの逃避は孤立やモノへの耽溺を生み、「オタク」文化の誕生ともなる。若者の言葉は磨り減っていき、彼らと大人たちとが意志疎通できる共通の言葉はますます減少し、価値観の違いは深刻な事態をもたらす。

「OTAKU」と表記することで門脇は、自分が興味を持つことには膨大なエネルギー・時間・金を費やすが、それ以外のことにはほとんど関心を示さず、人間嫌いで、人付き合いを避け、自分の殻に閉じこもるいわゆる"おたく"のみならず、次のような人々をも射程に入れて議論している。追っかけ、実戦さながらの戦争ゲームに生きがいを感じる人、"やおい本"小説／漫画の製作に熱中する人、援助交際する少女たち、TVゲームやビデオやコスプレやシミュレーションゲームなどの愛好家、怪獣おもちゃの収集家、ミュージシャン志願者などである。このように「世捨て」・「我捨て」する若者たちに対して、今の日本社会や大人たちは生きていることの充実感と将来の希望や展望を提供したり示唆できないから、彼らは危うい宗教に傾倒することにもなるのである。（37、88 参考）

もう一つ、キャラクターとキャラに関する興味深い議論を取り上げよう。荷宮は団塊ジュニアたちの娯楽を「役割分担型娯楽」と呼び、漫画や宝塚を初めとする「大衆娯楽」を取り巻く二つの逆風 ― 受け手側からの物語への欲求の消失と恋愛感情の消失 ― に言及する。「役割分担型娯楽」とは年齢・性別・趣味・学校等々が細かく設定された複数のキャラクターが登場する話で、それ以前の「大衆娯楽作品」とは異なり、羅列されたエピソードの順序を入れ替えても作品自体に影響がない。キャラクターに成長が無いとも言えると説明する。人物の複雑な性格や発展が緻密な構成の中でていねいに描かれるというより、切り取られた様々な像・姿（イメージ）が点滅する光のように発作的に提示されると考えれば良いのかもしれない。これまでのような重厚な人物―キャラクター―や重層な物語（story）を読み解くには、共通の文化基盤に立つ「知識・教養・知性・人間への洞察力・経験等」が必要だ。しかし「キャラ萌え」「スター原理主義」「役割分担型娯楽」にはそこまでのものは必要とされない。団塊ジュニアは、物語を理解しようと思っても理解するだけの能力をもたないため、物語に興味がないと言い張っている輩たちであり、ストーリーを読み解く能力の欠如によってこの娯楽の隆盛ももたらされた。（163-64）彼女の言うように、恋愛感情に限らず感情一般が希薄となり、読者は「物語」を欲求しないし、与えられても読みこなせないという大きな問題に直面しているのだ。

若者分析の視点や言説に多少違いはあっても、あくまで一般論としてであるが、前述の論者たちの議論を参考に若者たちの特徴を抽出することは困難ではなかろう。あらゆる人にもモノにも物語がある。小説では、物語の要素は登場人物（character）、背景（background）、筋（plot）だと言われる。キャラクターは物語に初めから内在

的に存在するのではなく、あくまで物語の受容者・読者の中に存在するが、人格を持った身体の表象として読むことができ、テクストの背後にそのlife — 生命・人生・生活 — を想像させるものである。一方、キャラは「人格・のようなもの」としての存在感しか感じさせない。(伊藤 95、97 参考) また、キャラを「アイデンティティという言葉で表わされるような一貫したものとしてではなく...断片的な要素を寄せ集めたもの」と説明可能であり、そのようなものとして若者たちは自らをもイメージしている。(土井 23-24) 物語の登場人物としてのキャラクターも、物語の受容者・読者自身のキャラクターも変化している。断片的イメージの累積である「キャラ」に変容・変質しているのだ。

現代の若者たちに語るべき物語はあっても、断片的な要素をつなぐはたらきをするものがなく一つにまとまらない。十分な言葉を持たないから、物語は織り紡がれないのだ。世界や困難と闘争せず逃走するばかりの若者たちの生は濃厚とは言えないから、リアリティも希薄である。生命感覚や身体感覚や感情は薄まり、鈍化し、同じように生きて悩み、悲しみ、苦しみ、怒り、喜ぶ他者へのまなざしも欠如しており、自身の物語自体からも他者の物語からも疎外されている。むしろ、自ら拒絶していると言ってもよい。他者の物語に対して共感できるわけがないのだ。それでは、いかにしてこの難題を乗り越えることができようか。物語とはまったく違ったものに頼るべきだとは思わない。物語のキャラクターやストーリーはすでに我々の目の前にあり、それを通して我々読者は自分を相対化する視線や自己内省力を培うことができる。すでにあるものを利用しないのは勿体無い。物語の典型的なものとしての良き文学作品を本当の意味で「読める」内なる読者を鍛えることで、物語を、言葉を、生きている実感を回復すればよいのである。そのために身近なテーマの一つである国や自己のアイデンティティ、あるいは社会と人間について何らかの示唆を与えてくれる小説を読むことが有効である。このことに異議はあるまい。

2. 国のかたち

日本と異なり、アメリカは建国の初めから移民の国である。経済をはじめグローバル化が進んだ現在、世界中の国々にはグローカルな—グローバルかつローカルな二重の—視点が必要となっている。(glocal　global　local)このような事態の下では新しい国のかたちや国民意識、国家と個人の関係を模索することとなろう。新しい国家観や国民国家論も期待される。そうであれば、さまざまな物語からそのヒントを得ることができる。例えば、初期アメリカの移民者たちが、国民国家としてのアメリカのアイデンティティや国のかたちについて、どのようなイメージ・物語をいかにして形成していったのかを語る物語と比較するのである。[2]

15歳の時迫害を逃れ家族と共にアメリカに渡ったロシア系ユダヤ人移民 Anzia Yezierska (1885?-1970) の"How I Found America"は、彼女の最初の短編集 *Hungry Hearts* (1920) に収録された、自伝的だがエッセイ風な要素もある短編小説である。小説の没頭 —「息をする度に私は恐怖にうち震え、影が見えれば恐怖で息が詰まり、足音がすれば身近に迫る獰猛なコサック兵の重い軍靴のように

思えて心は騒いだ。」(250) ―が示唆するように、主人公少女たち一家はロシアでのユダヤ人迫害から逃れて理想の国と信じるアメリカへやって来る。彼女たちと同じ船に乗っていた移民たちは「黄金の国」アメリカの最初の光景を見ようと、先を争って船のデッキに殺到する。男たちはひざまずき祈りを捧げ、女たちは胸にしっかり赤ん坊を抱き締め、涙を流している。小さい子たちはアメリカがよく見えるように大人に肩車され、嬉しさの余り跳ね回る子どももいる。見知らぬ者同志が抱きあって、喜び合う。この時「長い歳月を経た多くの夢が［主人公］の中で歌っていた ― 虐げられた民族の自由の歌を―『アメリカ、アメリカ、アメリカ』」(262)

主人公が思い描き理想の国と信じたアメリカでは、精白パンと肉が毎日食べられ、自分の考えをそのまま、自由な街中で話せるはずであった。もちろんコサック兵に捕まる心配もない。誰でも自分の家が持て、皆が同じように一緒に暮らせる。キリスト教徒もユダヤ教徒も一つ屋根の下に暮らす兄弟であり、上下貴賤の別はない。豊かな土地で、何でもたっぷりある。知識がどこまでも自由に流れ、学校や大学や図書館は無料であり、思いっきり勉強できる場所であった。しかし現実のアメリカは彼女の理想とは程遠い。寝室も、食事をする部屋も、料理を作る部屋もあるにはあるが、すべて陽が当たらない暗い陰鬱な部屋ばかりである。掃き溜めのような貧しい街の悪臭があまりにもひどく、馥郁たる木の香を放つ森林が静かに広がるロシアの大地が懐かしい。成功者も多いドイツ系移民などとの民族ゆえの差別、先行者と遅れてきた移民との格差もある。

主人公の性格・キャラクターには他の少年少女たちにはない美点がある。向学心に燃え、アメリカという国や社会状況について真剣に考え、自分の考えを的確に表現し発信する言葉を常に模索している。とはいっても、一家の生活費の稼ぎ手の一人として生活に追われ、勉強する余裕などなく、事故などにあって医者にかかれば即座に一家の生活は窮することになる。移民学校では、少女ならミシンかけや家事などを教えて自活を促す。学校の後援者Mrs. Olneyに対して主人公は言う：「私がアメリカに来たのは縫製工場で働くためでも、裕福な家で料理女として働くためでもありません。私はアメリカを改善する方法を色々考えました。でもその考えをどう言葉にすればいいのか、わかりません。それをできる場所はありませんか？」「アメリカの役に立ちたいという気持ちはとても大切だが、その最良の方法は職業訓練を受けて実社会の役に立つことを覚えることです」と優しい微笑みを浮かべながら諭すように言う女史に対して、さらに主人公は言う：「考えることはアメリカの役に立たないんですか？アメリカが欲しいのは私の肉体労働、私の手仕事だけで、世界が覆るようなすばらしい考えは必要ないんですか？生計を立てるためではなく、すばらしいすべてのことを言葉にするために私はアメリカに来たんです。ロシアでは言いたくても言えなかったことです。アメリカを新世界にするために来たんです。私の中にはすてきな夢がいっぱい詰まっています。でも、アメリカは私に何もさせてくれません。」(281-82)

女史に「世界をひっくり返すような大きなことをしたいなら、ここ以外の他の場所へ行くことね」(282) と言われた主人公にとって、妹の学校のMiss Lathamとの出会いは大きな転機となる。妹が言

うには、先生は他の先生とは全然違い、授業を中断しておもしろい話をいろいろしてくれる。先生らしくなくて友達みたいで、嘘のない人である。ラサム先生が作文の授業で妹たちに教えたこと―「ただ心に思ったことをそのまま書けばよい」―という一言で、自分の思いを表現する言葉を探していた主人公の胸中に激しくうず巻いていた思いが一気に目覚める。(291) この数日後、妹が先生から授業で教わったというJoseph Rudyard Kipling (1865-1936) の詩の一節を彼女も見ることになる。

しからば主のみぞ我らを称え
そして主のみぞ我らを咎める
金銭を求めて働くものは一人もなく
名声を求めて働くものは一人もなく
各々はただ労働の喜びを求めるものなり
各々はそれぞれの星のもとにあり
その目に映るままにその物を描く
万物を創りたる神の名代なれば (291)

キプリングの詩は、富や名声を追い求めて働くことは虚しいが、働くことの喜びは純粋なものであること、そして我々一人ひとりがそれぞれの仕事を神の名代として行い、咎められるとしても他の人間からではなく、ただ神からだけであると主張する。この詩に感銘を受けた主人公の頭の中では、「ただ心に思ったことをそのまま書けばよい」というラサム先生の言葉がこだまするようになる。彼女は自分の悩みを素直に打ち明けられると思い、直接先生に会い、「何もかも話してごらんなさい」と言われるままに心情を吐露する。意外にも、大人でありしかも子どもたちの先生でもあるラサム先生は、主人公の少女に「あなたと話ができて嬉しいわ。あなたの話はためになった。私の祖先は二百年前に同じように移民としてアメリカにやって来たピルグリム・ファーザーズだけれど、今のいつも不思議な活気に満ちた移民の人達のことをもっとよく知りたいと思っていたから。あなたが私に教えてくれたのよ。」と語る。アメリカ人から「ためになった」などと言われたことは、少女にはこれまで一度たりともなかったが、先生の謙虚さは本物であろう。

主人公は先生に苦しい日常を自分の言葉で語る：毎日考え、考え、考え抜くが、自分の思い・考えを誰にも話せないこと、人生をどうにかしたいと思うがどうにもできないこと、アメリカに来て以来ずっと「アメリカ」を探し続けていること、人生が大きすぎて持てあましていること、自分のことしか考えない人達の中で自分が迷子になっていること、現実から締め出されている気がすること、人を愛したいのに憎んでしまい、みんなから愛されたいのに憎まれていること。これらのことを夢中で包み隠さず話し「こんな激しい自分が嫌いだが、どうしようもない。自分の殻を突き破って自由な外の大気へ出るにはどうしたらいいのでしょうか？」という少女の問いに、先生は静かに伝える：自分自身と闘わないこと、自分の生命(いのち)の炎を燃やし過ぎないこと、今あなたを苦しめている利己主義と自己本位は抑圧された感情の煙にすぎないこと、あなたには自分の思いを語れる話し相手が必要であるこ

と、そしてその話し相手に自分がなれること。(294-96) 最後に先生は主人公に Waldo Frankの *Our America*という本の一節を読み聞かせる。

私たちは誰もがアメリカを探し求めて旅立つ。そして、その探究において、私たちはアメリカを創りあげる。私たちがどのような探究をするのか—それによって、私たちが創りあげるアメリカの本質が決定するのだ。(297)

この文章が教えるのは、アメリカのかたちというよりそれを探究すること自体、そして探究の仕方が問題であることだ。真摯に探究すれば、真摯なかたちと出会う。いいかげんに探究すれば、いいかげんなアメリカ像に到達する。主人公はこれまで一人で悩み、怒り、アメリカについても自分についても考えに考えてきた歳月が無駄ではなかったことを知り、幸福感に包まれる。よい稼ぎになる仕事、物質的に豊かで楽な生活に満足する誘惑とは無縁に、闘い続けてきたからだ。そしてこれが、このことこそがアメリカの魂、精神であること、自分の探究し続けてきた心そのものが「アメリカ」であることを知る。国のかたちは探究の結果というよりは探究者が探究し続けること自体に内在するのだ。

謙虚で人間に対する理解と洞察力に富むラサム先生と主人公は出会い、自分を正しく理解してもらい、適切なアドバイスを得た。同じ女性でも、文学・物語が常に身近にあることやジェンダー的価値観などの点で大きな差異が見られる、職業訓練学校のオルネー女史と対比できたことは、少女が女性の生き方を考える上でも有益であったろう。また、少女は聖書のみならず文学作品 — キプリングやフランクの文章 — から、生き方を学んだ。今の若者たちは便利な電気製品に囲まれ、家事労働も仕事もはるかに省力化が進んで余暇が生まれ、独自の文化を大人社会にむけて発信している。昔は想像もつかなかったネットのお陰で世界は狭くなり、かつて困難であった経験が容易に、そして迅速にできるようになった。ある意味では恵まれた飽食と技術革新の時代に彼らは生き、ほとんどが昔の人達の苦労とは無縁である。ハングリー精神が希薄になったとも言われるが、この小説のような艱難辛苦や青春らしい悩みや「キャラクター」の精神的成長物語をダサいと考え、シニカルに時代後れであると一笑に付すだろうか。確かにそのような反応も多いであろう。しかし重厚な文学作品はそれを読める能力のある読者を得れば、まだまだ未来があるのではなかろうか。この小説などのように、正しく理解され、あるいは、再評価されるべき文学作品がまだまだあろう。

3．人のありよう

2009年の今、当然ながらイージアスカのユダヤ系移民の世界とは様変わりした時代となった。グローバル化が進み、世界はネットでつながり、若者文化が主流文化として時代や経済の牽引役ともなっている。しかし冷戦時代が終結して一見平穏に見えても、現代社会は核とその廃棄物 — いや、それのみならず廃棄物一般—の、そしてネットの見えざる脅威と陰謀に支配されている。人間の愚かしさいかんでは人類は滅亡の危機に瀕する。

ネット社会と心の悩みを論じる心療内科医、今(こん)はネット社会の特質として以下のような点をあげて

いる：匿名性；孤独；ひきこもり；陰湿ないじめ・性的暴力的情報・犯罪への入口・現実の生活では知り合うことのできないような人と出会えたり、仲間になれること；人の欲望も表現も激しさを増し、極端になる傾向があること；同質性集団特有の集団心理にとらわれやすいこと；幼児的自己愛と ― 背景に臆病さがあるにしても ― 傲慢さを培養することなどである。ネットは簡単・確実・迅速だが非共感的でもあるように、両刃の刀なのだ。より具体的で本論の議論と関係するネットの特質が、子どもの養育に関する悪影響とゲーム依存・ネット依存である。感情応答性がうまく育たないこと、ゲームに熱中すると共感性や社会性を発達させる機会が失われることだ。また、人間の集団構成の原理は垂直的ヒエラルキー型であるが、ネット社会は原則的に水平的平等の原理であるため、このずれから生じる違和感がヒステリックな言葉や非常識な行動、さらには思考の極端さや単純さにつながる恐れがある。(81-83 参考) このようなネット社会に育ち、悪影響を被った若者が学ぶべき生き方、人のありようを示唆している小説の一つが Don DeLillo (1936-) の *Underworld* (1997) だ。共感や社会性を発達させる方法の一つは、人と人との繋がりを回復することの意義を示唆する物語を読むことである。

『アンダーワールド』の小説世界では、1950年代初頭 (1951) から90年代にかけてのアメリカ社会の写実的描写が展開する。核やネットの悪の脅威を描いたスケールの大きい小説であるが、この章ではネット社会における人のありように焦点を絞って、この小説を読んでみよう。[3]冷戦時代が終息する1990年代になると、世界は東側も西側も違いがなくなっている。小説の語り手Nickによれば、現代の特徴は「資本が文化内の微妙な差異を焼きつくし、海外投資、世界市場、企業買収、超国家的メディアが運ぶ情報の流れ、電子マネーとサイバーセックス―人の手が触れることのない通貨とコンピューターによる安全なセックス―による希薄化の効果、消費者の欲望の一点集中」(785) である。「まがいものの画一性があらゆるものに浸透している」(786) のが現代社会なのだ。独自性が希薄となった可視世界の「現実」に対してその下の不可視の世界 (underworld) に存在するのは、コンピューターによって繋がるネットワークと、世界に一様に網の目のように広がっている、核による見えざる死の脅威と陰謀である。核廃棄物そして広く廃棄物全般の処理という厄介な問題も、核の後産や文明の副産物として現代の脅威となっている。人間関係にせよ、ネットの接続にせよ、世界の悪の見えない陰謀にせよ、「繋がり (connection)」や「関係 (link, relationship)」などの言説が小説中には頻出する。小説の重要なテーマは「繋がり」なのだ。

小説のエピローグが主要人物の再／最終的焦点化による強調であると考えれば、そこに描写される二人の人生物語を考察することは意義があろう。一人は、傍目には一見成功者のように思える廃棄物アナリストのニックである。彼の人生は劇的だ。過失致死の科で18歳未満非行少年のための矯正院に送られる。社会に対して反抗的だった彼はそこで体制側に改宗し、従順、正しい言動、整合性、組織的体系、規則性を身につける。しかし体制側こそ組織的体系や規則性の欠如で脱走を許したりボヤを出したり綻びを見せるので、彼は大いに落胆し、憤慨もする。早期釈放後はイエズス会の神父の感化

を受け、彼の言う見慣れない単語"velleity"（微かな意欲、行動に現れない単なる願望）と"quotidian"（凡庸）を「記録し、書き、学習し、音節ごとにはっきり発音し」その言葉の意味と価値を自分の内に定着させる。「自分を造り上げたものから逃れる唯一の方法である」(543) と信じたからである。イージアスカの主人公少女と同様に、彼も言葉を非常に強く意識する。自分の考えや真実を表す言葉を模索している。このことから言語と自己形成には深い関係があることがわかる。かつて自分の居場所を必死で捜していた20歳の頃もニックは、黒死病が流行った14世紀頃の無名の神秘家の作らしい *The Cloud of Unknowing* を読み、知性を通して神を知ることは不可能だと判る。神に近づくことができる言葉であり、神という観念に自分を縛りつけるためにその本が探すように勧める、その言葉を探す。言葉探究は強迫的とも言えるほど執拗である。しかし彼がわかったことは「問題は言語そのものにあり、言語を変えなければならない、暗示や陰影のない純粋な言葉を見つけ出さねばならない」ということである。英語を見限って彼が見つけたのはスペイン人神秘家の言葉 *Todo y nada*（全と無）であった。そもそも「純粋な言葉」など存在するのだろうかと考えられるが、彼の模索は続く。

問題が言語にあるとしても、そして神に近づくことに効果的な、できれば一音節の純粋な言葉をニックが見つけられるか否かにかかわらず、意欲、願望、指向性が小さければ浅いレベルの生き様・人生・命でしかあるまい。体制に敵対しぎこちなく自己主張していた彼は、今ではそれに完全に順応・同化している。妻と親友の不倫を知っても怒りも憎しみも感じず、むしろほっとする彼が心から希求するのは「乱雑な日々。乱雑など屁とも思っていなかったあの日々」(806) ― かつての自分に戻ることである。彼は「無秩序の日々を取り戻したいと思う。この世に生きていると言い切ることができ、生身の皮膚が波打ち、傍若無人で本物だった日々。平穏とは無縁の乱雑な日々。本物の路地を歩き回り、事にはいつも乱暴にあたり、怒りに燃えいつでも準備万端だった日々。他人から見れば脅威であり、自分でもわけが分からなく謎でしかなかったあの日々」(810) の自分である。その頃は本当に「生きている」と断言できた。現代社会は、今の社会的成功や物質的豊かさは、人を骨抜きにしてしまう。不倫の事実で人間どうしの繋がりに対する信頼も失い、その欺瞞に直面したニックは、無鉄砲で他人にとっても自分にとっても危険だが、がむしゃらに生きていたかつての自分に郷愁をおぼえる。

彼が希求しているとおりに生きているのが、12歳の浮浪児で身寄りもまったくない少女Esmeraldaである。明確な固有性が失われ生が取り返しのつかないほど希薄になりつつある現代社会にあって、彼女は一秒一秒を本当に生きていると言える。ほとんどの現代人が失ってしまった本当の意味での生があるのだ。子どもから大人まで、彼女たちホームレスが住み、廃品回収業者の廃品置き場でもある「壁」地域には、テレビが見られないという他所にはない恵みがあった。文明から隔絶されていたといえる。しかしここですら、おんぼろ自転車をこいで発電し廃品のテレビが見えるようになり、文明、資本主義経済、消費社会の暴力がひたひたと迫ってきている。廃品回収業社長はかつてはグラフィティアートの達人で、近所で子どもが死ぬたびに仲間たちと記念に壁に天使を描いていたが、今はインターネットで自分が扱う廃車を宣伝し、世界的な事業展開を図ろうと野心に燃えている。ほどなくここも

高度資本主義経済に侵食され、コンピューターによって繋がるネットワーク世界に取り込まれ、どこにでもある場所になってしまうだろう。そして、現代社会は彼女があるがままに生き続けることを許さない。彼女を殺したのはおそらくそれを造ってきた大人であり、その欲望である。

エピローグに登場するもう一人の重要人物は、老尼僧Edgarである。多くの現代人にとって「疑念と非現実の信仰、神を放射能で置き換えてしまう信仰［が世界を席巻し］アルファ粒子とそれらを形成する全知全能のシステム、果てしなく繋がる環が神の信仰に取って代わ」(251) っても、宗教者にとって人間社会はキリスト教の全知全能の神の愛の下で至福に繋がり、聖職者は神の愛の担い手であるはずだ。エドガーはキリスト教の権威と力の象徴であり続けたが、最近は自分の無力を感じ始め、神不在の世界の「現実」を憂えている。悩める彼女をますます絶望的にするのがエスメラルダ強姦・遺体投棄事件であり、神への不信というよりは悪の力、何か別の巨大なエネルギーの塊のようなものの存在を彼女は確信している。

警察による事件の真相解明は功を奏さず、エスメラルダの亡霊が出るという噂だけがひとり歩きし始める。亡霊などではなく消された看板の文字が少女のように見えるだけだと一見合理的な解釈を下す若い尼僧と共に、エドガーは現場に確かめに行く。精霊の気配を感じながら少女の出現を待つ群衆の中で、彼女は「何もかもが間近に感じられ、自分にぶつかってくるような気がする ― 悲しみ、喪失感、栄光、年老いた母の悲しい憐憫、そしてどこか深いところにある哀悼の力。その力が彼女に、体を震わせ嘆き悲しむ人々と自分が不可分であると感じさせ… 彼女は束の間自分の名前を失い、個人史の細部を忘れ、肉体のない液状化した事実となって群集に溶け込む。」(823) 光線を受けた広告板にエスメラルダの姿を確かに見た瞬間、エドガーは飛行機燃料の匂いを思い出す。経験が香りで認知される一種の共感覚である。「飛行機燃料の匂いは経験の香りであり、焦げたヒマラヤ杉や樹脂の匂いであり、その瞬間を全体として保つ媒体である。この一瞬にあらゆる瞬間、魂の恍惚とした喝采、言葉にされない親密さ、深い信仰を共有しているという連帯感の全体が収まっている。」(824) 人々のさまざまな思いや心的エネルギーの「ことば」がエドガーの皮膚を刺すように語りかけ、そのことばの力が彼女の身体に自分が群衆一人ひとりと確実に繋がっていることを教える。彼女が到達したことばは所与の言語とは全く異なるものである。今、彼女は自分の身体すべてを揺さぶるそのことばに身をゆだねて、それを聴く。堅固な肉体の実体性などとは無縁な液状化した身体と感覚認識を持ち、「身体の知」によって世界のすがたと人のありようを直覚する。一瞬と時間全体、自と他、一と全が相互に内蔵・内属し一つになっている、所与のものとは異なる時空間で、人と人との繋がりを身体に感じて恍惚となりながら、彼女は世界と存在の秘密に達したのだ。

自分が世界の中で分節され他とは独立した実体として存在していると思っていたエドガーは今、名前や個人的生活史で象徴される個別性も実体性も持たず、群衆そしてさらに全世界と一体になっている。これまで自分が信じてきた世界の直中で彼女は、そこに密かにしかし厳然と存在する名状しがたい別の領域に入り込む。これも一つのアンダーワールドだが可視・不可視、表・裏、光・陰のような

二元論言説における後者の世界とは異なる世界であり、ロゴスの二元論の知では到達できない。彼女はエスメラルダの奇跡と群衆の中で、身体の直接体験を通して、自・他の不可分、不二の直接的・身体的繋がりのネットワークを体験したのだ。小説では、この瞬間エドガーはもう「この世」に生きてはいない。彼女が言うように、固有性や実体性のない生の事実そのものとなった彼女に残されたことは「この世での死」である。しかし彼女が行き着いたのは天国の至福ではなく、コンピューターの電脳空間である。ニックの息子Jeffは13歳の頃、自分が世界の事象に影響を与えることが可能だと信じた。空飛ぶ飛行機は念じれば爆破可能であり、自分と世界の境界は薄く行き来が自由だと考えた。今はネットの万能性の神話を信じ、ウェブを神聖視し、そこに世界の真実ありと信じて疑わない。ネット上で「奇跡」を検索している彼に言及しながら、語り手ニックは「真の奇跡とはウェブでありネットであり、そこでは誰もが同時にどこにでも存在する。誰に見られることもなく息子は今その空間にいるのだ」(808) と語る。しかし、はたして電脳空間は真に幸福な場所であろうか。エピローグに挿入されたキーストローク２では、電脳空間でのエドガーの死後が語られる。彼女は「衣装を脱ぎ捨て裸同然で、ワールド・ワイド・ウェブのあらゆる接続に身を晒している。」(824) ここは所与の概念としての「時間も空間もなく、あるのはただ接続（connections）のみ」のアンダーワールドで「人類のすべての知識が集積され、リンクされ、ハイパーリンクされ、サイトが別のサイトに、事実が別の事実に繋がる... 際限のない世界である。」(825) しかし彼女がエスメラルダの再来を人々と共に待った時に感じた、自分と他の人々との繋がりや魂の底から沸き上がるような高揚感や可能性の新しい信仰とは全く異なるものが、ここにはある。通常の意味での時空間ではない電脳空間での無限の繋がりは、ロゴスあるいはコンピューターによる合理的知の網の目であり、パラノイアの用意周到な罠だ。彼女は諸システムの呪縛とウェブやネットの狂気を身に感じ、また常にハッカーの脅威にさらされて居心地悪い。一方、生身の人間どうしのつながりは心地よく、安楽であった。不可視ではあるが呪縛から逃れられず、なすが儘にならざるを得ないネットの繋がりではなく、このような人間どうしのつながりが、この小説が示唆する人のありようであると考えてよい。

４．今ここにある危機 ― グローカル時代と文学の未来

2008年の金融危機などでグローバル経済の綻びも露になりはじめ、今は世界と地域的生活世界の両方の視点・立場からの思考と行動が求められている。グローカル時代の今、国のかたちも人のありようも、これまでとは異なる様相を呈するであろうことが予想されるし、それに伴ってラディカルな意識変革が必要になってくるだろう。具体的にどんなふうに我々が変わればよいかを、誰が、何が示唆してくれるのだろうか。以前であれば、親や共同体の教育力も期待できた。そして人は文学作品に親しんだ。しかし今は、友達関係のような親子関係の中で、親に社会の規範や生き方指南を求めるのは困難であり、共同体の人間関係も疎遠になっている。文学を読む能力も怪しくなったし、そもそも人は文学から離れてしまっている。今日本人に求められているのが、社会性というよりは「社会力」―

門脇によれば「社会の運営に積極的にかかわろうとする意思であり、それができる能力」(160) ― であり、携帯電話で友達を多数作ることではなく相手のことを深く理解しながら共にひとつの世界で生きていくことが可能になることであるとすれば、共通のことばを持ち ― 言葉の意味を共有でき ― 互いに共感できるという意味でのコミュニケーション能力の涵養が必要であろう。そのためには本論で例示したような小説・物語が資するのである。

時あたかも、政権交代をかけた衆議院選挙の真っ最中である。2008年に行われた全国９都道府県、20校963人の高校生の意識調査で、政治意識について二段階で聞いた結果、「あなたは日本の政治について興味関心がありますか」という質問に対して36％が関心ありと答え、「日本社会の様々な動きや事件に興味関心がありますか」という質問に対しては54％が関心ありと答えているという。後者の質問に関しては犯罪事件やくだらない事件を含めての数字であろうから、純粋な政治意識を持つ高校生がどれだけいるかは簡単には言えないにしても、関心がない、およびあまり関心がないと返答したのが合わせて19％だったことから、８割が何らかの社会的関心を持っていると推定できる。ただ社会的関心が政治につながらず、政党や政治家に対してだらしなさや胡散臭さを感じていて、何かを、社会を変えようという意志にはならない。大人の二種類の無党派層 ― まったく無関心／無気力な大人たちと、関心は持っていても普通の時には行動を起こさないが世論が動いて何か変わりそうだと思えば行動する大人たち ― が、高校生にも反映しているようだと推測される。極端に言えばと断った上で、座談会のある参加者は「政治に関心がある生徒も、まわりの生徒には無関心。自分は政治に参加意欲もあるし、関心もあるけれど自分の周りのやつはダメだと、政治的議論が行われる雰囲気がないので、まわりのやつはバカばっかりだと思っている」と分析している。別の参加者は「バカばっかりというより、そのことを話すと浮いてしまうし、話題がとぎれてしまうという不安感がある」と補足説明している。また、18歳選挙権については、自分たちはまだ判断能力がないという答が一番多いという結果だそうだ。(全国民主主義教育研究会　編 300-2参考)

これらの調査結果から推定できる現代の高校生像は、いつの世にも見られるであろう大人たちに対する反感・反発や18歳の今の自分の判断力不足を知っていることに加え、社会的関心があっても強い政治的意識にはならないこと、同世代の他の人間の幼さを意識していても、彼ら・彼女たちとある程度調子を合わせていく世渡りの巧みさなどであろう。コミュニケーションの方法がかつてとは様変わりし、携帯電話やメールなどのお陰で、その能力や友達を作る力などはむしろかつての若者より優れているという意見もある。しかし様々な世代の人々との関係がうまく結べないこと、人間関係の希薄化、思春期に特有の危うさなどを考えれば、まだまだ若者たちに「物語」は必要である。

日本では今、政権交代の期待が膨らんでいる。国のかたちや人・社会のありようや自分というものの探究に関して、文学の様々な物語は多くの示唆を提供してくれよう。本論ではアメリカ建国初期の移民の少女が国のかたちを作っていく物語と、現代のネット社会における人間どうしの繋がりや人のありようについての物語を紹介した。今ここにある危機の回避には文学をいかに教育に生かすかが重

要であろう。実学志向の日本で、しかも英語教育カリキュラムの改悪で学生の英語力が嘆かわしいほど落ち込み、アメリカ文学を勉強しようとういう学生も年々減りつつある現在の日本では、凋落しつつあるアメリカ文学の未来もこれにかかっていると言える。

註

1．「かわいい」という言説については、小原一馬の「かわいいおばあちゃん」（稲垣　編 154-91）が参考になる。

2．例えば Kathleen Nigro はこの時代が背景となっている Rachel Calof を論じ、Laura Ingalls Wilder や Yezierskaにも言及しているが、国家（意識）や国民として生きることについての示唆を与えてくれる小説を読むという本論の主旨からは、Yezierska の小説が最適なものの一つと考える。また、彼女の小説を論ずるに際しては、東雄一郎氏による邦訳と解説を参考にさせていただいた。

3．この小説については拙書『現代アメリカ文学と仏教 ― 西洋と東洋、宗教と文学を越境する』（岡山大学文学部研究叢書28の第８章「身体の知／テクノロジーの痴」で詳細に論じた。参考にされたい。

一部重複するところがあることを断っておく。

引証文献

Yezierska、Anzia. "How I Found America." *Hungry Hearts*. New York：Houghton Mifflin, 1920.

伊藤剛。『テヅカ・イズ・デッド ― ひらかれたマンガ表現論へ』。東京：NTT出版、2005。

稲垣恭子　編。『子ども・学校・社会 ― 教育と文化の社会学』。京都：世界思想社、2006。

門脇厚司。『親と子の社会力 ― 非社会化時代の子育てと教育』。東京：朝日出版社、2003。

苅谷剛彦。『教育改革の幻想』。東京：筑摩書房、2002。

今（こん）　忠（ただし）。「ネット社会とこころの悩みとDAM理論」。『こころの科学』144（2009.3）：81-88。

全国民主主義教育研究会　編。「座談会　高校生意識調査　データと分析」。『民主主義教育　21-3：現代資本主義は変わったか』。（東京：同時代社、2009.6）：283-307。

棚次正和。『祈りの人間学 ―いきいきと生きる』。京都：世界思想社、2009。

土井隆義。『キャラ化する／される子どもたち ― 排除型社会における新たな人間像』。東京：岩波書店、2009。

DeLillo, Don.　*Underworld*. London: Picador, 1999.

中西新太郎。『若者たちに何が起こっているのか』。東京：花伝社、2004。

Nigro, Kathleen. "Rachel Calof and Jewish Immigrant Women ― Between a 'land of opportunity' and a 'terrible new world.'" *Studies in American Jewish Literature* 27（2008）：23-33.

荷宮和子。「団塊ジュニアはバカなのか⁉—サブカルチャーで読み解くジェンダー」。『大航海』43（2002.7）：162-69。

東雄一郎。「私のアメリカ発見—アンジア・イージアスカ」。駒沢大学文学部英米文学科。『英米文学』43（2008）：1-56。